

# 平成27年度小麦作柄現地調査の概要について

平成27年7月1日(水)～3日(金)の3日間の日程で、小麦作柄現地調査を行った。

本調査には、北海道農政部、北海道立総合研究機構農業研究本部、ホクレン農業協同組合連合会、北海道農業共済組合、農林水産省北海道農政事務所、北海道農業研究センター、北海道農産物集荷協同組合、道内製粉会社、北海道米麦改良協会の関係機関・団体等から、のべ44名が参加した。

各現地圃場では、生産者の方々およびJA、農業改良普及センター等の関係者の皆さんに参加していただき、地域および圃場の小麦の生育状況について説明いただいた。



参加者一同(茅室町 吉本氏圃場)

調査先は、オホーツク管内では、小清水町 安田和弘氏、村松正道氏、小清水町美和地区コンバイン利用組合、網走市 オホーツク網走第21営農集団利用組合の4カ所。十勝管内は、帯広市 外山隆祥氏、茅室町 吉本博之氏、鹿追町 上村政浩氏の3カ所。上川管内は美瑛町 増山敏之氏の1カ所、空知管内は、美唄市 杉野彰仁氏、岩見沢市 北村試験圃、伊藤浩光氏の2カ所、石狩管内は新篠津村 木野村修身氏の1カ所の合計12カ所で行った。また、調査終了後には、JA新しのつにおいて検討会を行い、本年度の小麦生育の現況と今後の技術的対策についてとりまとめた。

秋まき小麦の生育経過については、秋期は平年並に播種作業が行われ、越冬前の生育も概ね平年並であった。春期は全道的に融雪が早く越冬は平年並であった。融雪後、4月下旬から5月中旬にかけて高温少雨で経過したことから生育が進み、幼穂形成期、出穂期は各地区とも平年より大幅に早まった。

7月1日現在の「農作物の生育状況」(北海道農政部発表)では、稈長、穂長、穂数とも平年並で生育は5日早いと報告されている。今回の調査においてもほぼ同様な傾向ではあるが、穂数が平年以上に確保されている事例も多く見られた。

本年は、融雪以降、高温少雨で推移したことで幼穂形成期、止葉期が早まり茎数もやや少なかったが、5月中下旬のまとまった降雨により茎数の減少は緩やかで、穂数は平年並を確保している。6月上旬に平年を上回る降雨と一時的な低温があったものの、登熟は順調に進んでいるように観察された。

収量品質に影響する倒伏については、道央の一部圃場で肥料散布の掛け合わせ部分に発生が見られる。今後の気象経過にもよるが、倒伏面積の拡大も懸念されるので今後の生育を注視していきたい。

また、病害虫では、開花期頃に低温となり降雨が多かった地域もあり、赤かび病の多発が心配されたが適正な防除が実施されており、今回の調査では発病は比較的少ないと観察された。

全道的に見ると、今後の気象条件が平年並に経過すれば十分な収量を確保できると期待される。

秋まき小麦「きたほなみ」の栽培について、品種本来の特性を發揮させるために地域毎の栽培環境に応じた播種量の設定や作業機械体系の工夫による播種精度の向上、地域の土壌条件に応じた施肥の実践など、普及センターやJA、生産者が一丸となって取り組んでいる状況をつぶさに把握することができた。

「きたほなみ」は、実需者からの製粉性等で高く評価されていることから、このような取組みにより、更なる品質の向上と生産の安定を期待したい。

春まき小麦は、融雪が早くその後も高温少雨で経過したことから、早期に播種作業が行われた。少雨のため出芽ムラや圃場間のバラツキが多少見られるものの、播種が早く、出芽以降も高温で経過したため、生育は進んでいる。

生育前半、少雨の影響で草丈の伸長は緩慢であったものの、その後の降雨で稈長、穂長は平年並をとっている。また穂数は平年よりも多く確保されている。

本調査では、圃場間での生育のバラツキが見られるが、春まき小麦の生育は全般的に順調となっている。



調査圃場(小清水町 村松氏圃場)

次に、今回調査を行った生産者の取組みの一部を紹介する。小清水町の安田和弘氏は、平成26年度全国麦作共励会で農林水産大臣賞を受賞された生産者である。安田氏の圃場は、融雪ムラで生育にムラや起生期追肥が少雨の影響で十分な効果がなかったなどあったが、調査圃場の生育は良く揃っていた。

安田氏の小麦栽培のポイントとして、土づくりと播種精度の確保が大きな特徴となっている。小麦収穫後に緑肥(えん麦野生種)を栽培するとともに、小麦の作付後に完熟たい肥を5t/10a程度投入し、地力の維持増進に努めている。

また、播種作業もパワーハローとウェッジリングローラーを利用した播種床づくりを行い、播種深度の安定化させ出芽率を高めている。

施肥では、起生期の施肥では茎数の状況を確認して、茎数が過度にならないよう追肥量を調節し、その後も生育に応じた追肥を行っている。

安田氏の小麦づくりは、地力の増進と生育に応じた適切な追肥を両輪として、安定多収を実現している(平成26年度 収量940kg/10a、上位等級比率(規格外含む)97.6%、子実蛋白含量10.6%)。

今回の調査では、継続的な肥料施用や緑肥栽培による土づくりに取り組む生産者がほとんどであった。やはり作物栽培の基本である土づくりに真正面から取り組む事が、小麦の安定多収の条件であると強く実感するものであった。



検討会(JA新しのつ)

検討会では、本年の作柄について、生育が平年よりも早く、穂数も平年よりやや多くなっていること、出穂以降に降雨があり登熟に要する水分が供給されていること、出穂以降の比較的低温条件でゆっくりと登熟が進んでいること、また、赤かび病などの病害も少ないとから、平年並以上の生産量を期待したいという意見が多く挙げられた。

小麦は、登熟期間の気象条件が収量性や品質が大きく影響するもので、収量構成要素を確保できても期待した収量品質を得られない場合がある。今後も気象が良好に経過し、平年並以上の作柄になることを期待したい。

執筆者：北海道農政部技術普及課

北見農試技術普及室

上席普及指導員 三宅俊秀  
(北海道小麦品質向上対策委員会委員長)